

(始良郡始良町大字西餅田字建昌城)

位置と環境

本遺跡は、始良町の南半に広がる沖積低地部のほぼ中央を西北から東南へと伸びる山塊の南端に立地する。この山塊は入戸火砕流堆積物によって形成されており、標高100m前後を測る。

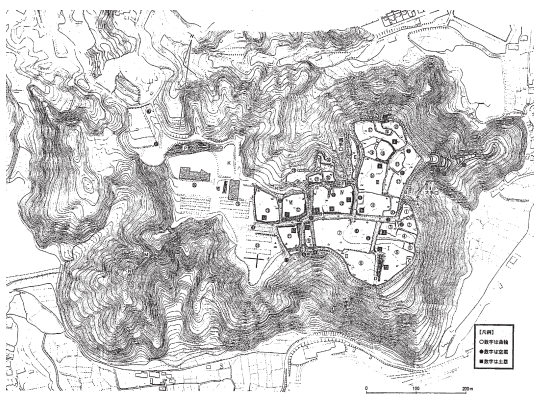
調査の経緯

建昌城跡は、15世紀後半に豊州家島津氏により築かれた大規模な山城跡として知られてきた。

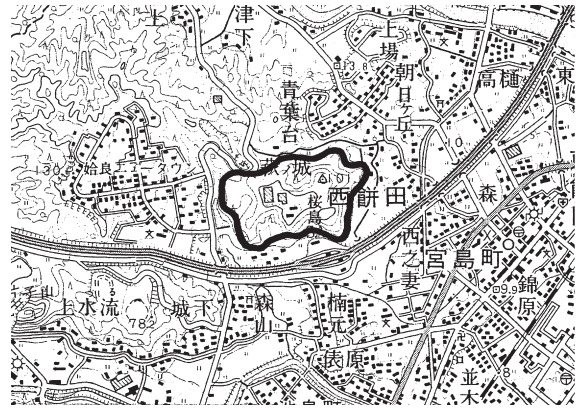
遺跡が立地している山塊頂上はおおむね平坦面を形成しており、その平坦面の面積は約10万㎡である(第2図)。東側約7万㎡には中世城郭に関わる空堀・曲輪が良好に残っており、すでに町指定史跡となっている。町では育雛センターによって削平された西側約3万㎡を活用した公園整備を計画したため、昭和63年から平成2年、平成11年から16年度まで町教育委員会が発掘調査を実施している。

遺構と遺物

調査の結果、中世城郭の遺構面の約3m下に、縄文時代草創期および早期前葉～中葉の遺構・遺物が数多く検出された。縄文時代早期以前の遺跡は、約7,500年前に噴火した蒲生町米丸マールの噴出物によってパックされた状態で、噴出物層の厚さは約2mを測る。この層の最下部には当時の樹葉が押し潰された痕跡が明瞭に残っており、当時の火山災害の様子をうかがうことができる。また、縄文時代早期



第2図 建昌城跡全体測量図および調査区配置図
(1:15,000)



第1図 建昌城跡の位置

と草創期を分ける薩摩火山灰層(約11,500年前)も約0.3mの厚さで堆積している。

A. 縄文時代草創期(第3図)

遺構としては、竪穴状遺構8基、集石遺構16基、炉状遺構8基、土坑110基を検出した。

竪穴状遺構(SX)は4基検出した。平面形態は、略楕円形・略円形を呈する。いずれの竪穴状遺構でも、竪穴に近接して小形土坑がめぐる状況にある。

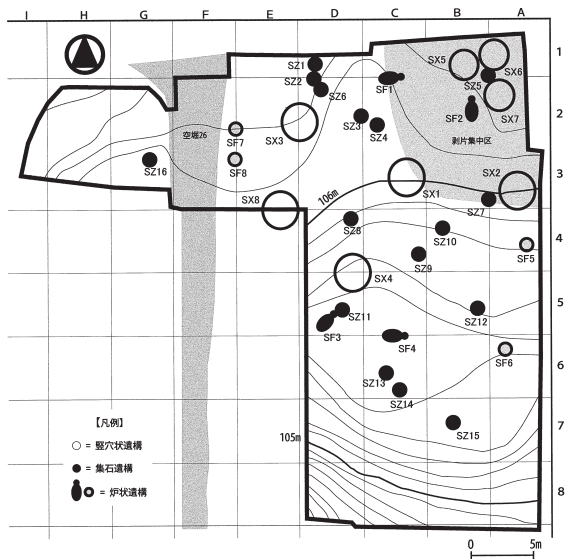
集石遺構(SZ)は15基が検出されており、調査区南端を除いた尾根筋上に散在して分布する。集石には平坦面上に礫が散在するものと、浅い土坑(あるいは自然の落ち込み)内に礫が集中するものがある。

炉状遺構としては、いわゆる連穴土坑を3基(SF1・3・4)と、ブリッジ部は確認し得なかったが、その可能性を持つもの1基(SF2)、埋土に焼土を含む土坑4基(SF5～8)を検出した。

出土した遺物(第5図)としては、無文土器(4～12・14～17)、隆帯文土器の可能性を持つもの(1～3)、石鏃(18～21)、尖頭状石器(22)、二次加工剥片、敲・磨石(23・24)、石皿(25)などがある。

出土した土器の大半は無文の土器であり、限定的ながら隆帯文土器の可能性を持つもの、爪先圧痕状の痕跡がみられるもの(13)が含まれる。

石器の組成では磨石の出土点数が多いのが特徴である。石鏃には未成品と考えられるものが含まれ、かつ不定形な黒曜石剥片が多く出土していることから、石鏃を中心とした石器製作が行なわれていた可能性が高い。



第3図 縄文時代草創期 遺構配置模式図（1：600）

炭化物を含めた遺物の分布は、調査区北半部に集中する傾向がみられることから、草創期の居住域は、北西から南東に向かって伸びる尾根筋の高位部を利用していたと考えられる。

B. 縄文時代早期前葉～中葉（第4図）

遺構は、竪穴状遺構66基、集石46基、炉状遺構24基、石斧埋納遺構1基を検出した。

竪穴状遺構は土坑約300基、明確な掘り込みを有するもので、多くは平面形が隅丸方形ないし楕円形を呈し、竪穴縁辺外部に小形土坑が検出されている。SX5の竪穴底面では円筒土器が横転した状態で角筒土器の大形破片とともに出土した（第5図29・30）。

集石遺構は、礫が一定の範囲に密集するものと、散在する傾向を示すものがある。

炉状遺構のうち、連穴土坑の可能性が考えられるものは、重複して使用されている。

石斧埋納遺構は、2個体の完形の石斧（第5図34・35）が隣接して浅い土坑の内部に置かれていた。

各種遺構の分布状況をみると、中央に集石遺構、土坑が集中する空間があり、その周囲を竪穴状遺構、炉状遺構が取り巻くという全体形を呈している。特に調査区西半部には、竪穴状遺構、炉状遺構が著しく集中し、水平・垂直方向に重複関係が確認できる。

遺物は2万点以上の土器片と石器（剥片・破片を含む）が出土した（第5図）。出土する土器型式に

は、水迫式（26）・前平式（27・28）・志風頭式（30）・加栗山式（29）・吉田式・石坂式・下剝峰式・桑ノ丸式・押型文土器・無文土器・中原式・妙見式・平椀式・塞ノ神式など、早期前葉から中葉あるいは後葉に及んで多岐にわたっている。出土量は加栗山式が最も多く、次いで志風頭式・石坂式となる。

石器では、石鏃・尖頭器・削器・搔器・二次加工剥片・石斧・礫器・敲石・磨石（33）・石皿があり、ほかに黒曜石・蛋白石・鉄石英・安山岩などの剥片が多数出土している。石斧には大形のもの和小形のもの（31・32）に分類することができ、いずれも刃部を中心に磨研を施した局部磨製石斧である。

特徴

縄文時代草創期から早期中葉まで断続的に生活が営まれた痕跡を良好に残す遺跡である。年代的な基準となる火山灰層も複数存在している。

資料の所在

出土遺物は、始良町歴史民俗資料館に保管されている。

参考文献

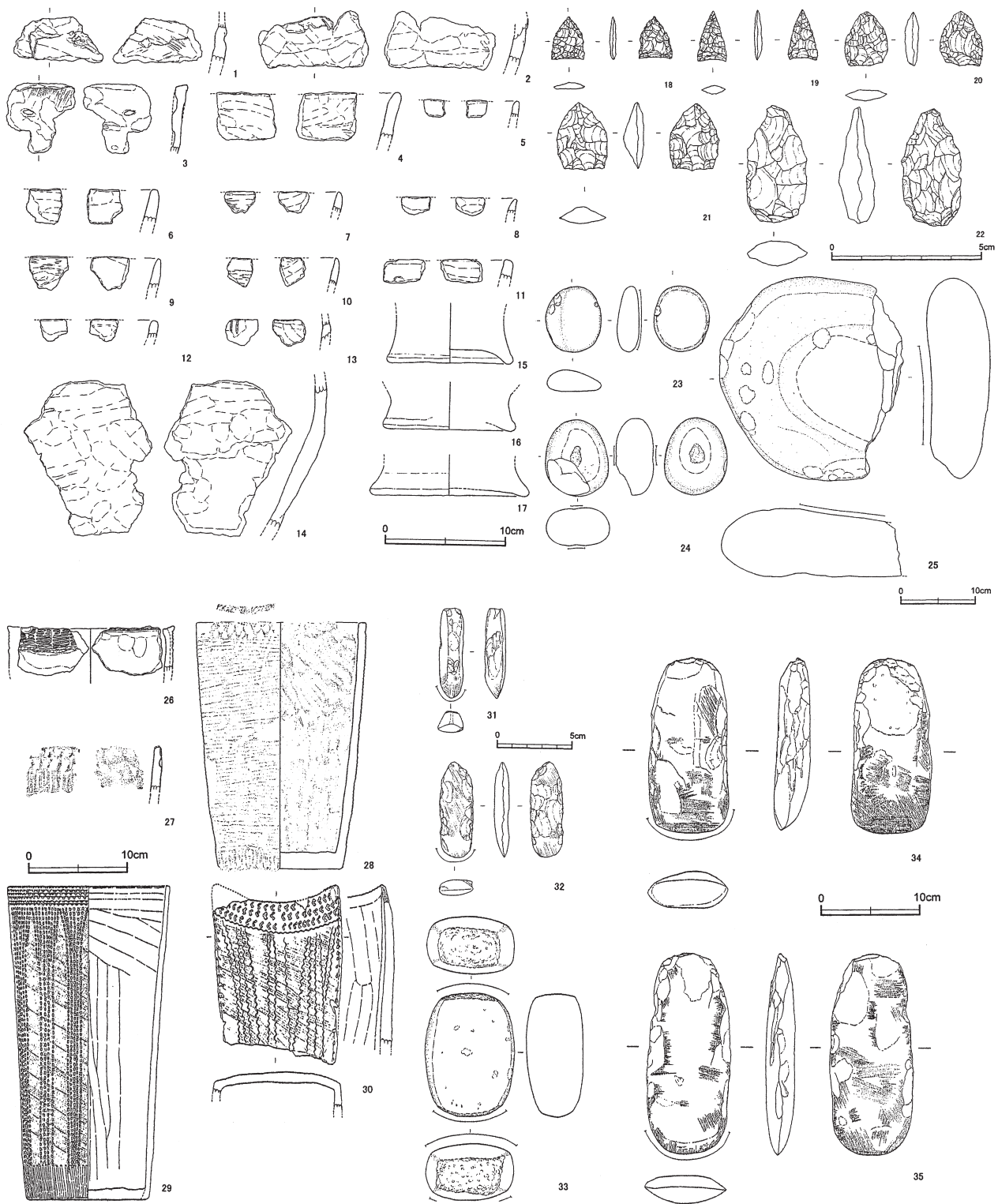
始良町教育委員会1991「建昌城跡」『始良町埋蔵文化財発掘調査報告書』第4集

始良町教育委員会2002「建昌城跡発掘調査概要報告書」『始良町埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集

（深野信之）



第4図 縄文時代早期前葉 遺構配置模式図（1：600）



第5図 建昌城跡出土遺物

(1~25=草創期, 26~35 早期前葉, 1~17=1:5, 18~22=1:2, 23~25・33=1:8, 26~30・34・35=1:6, 31・32=1:4)